

『筑紫新聞』第壹號の版式と文字に関する研究

大串, 誠寿

<https://doi.org/10.15017/1470651>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（芸術工学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	大串 誠寿			
論文名	『筑紫新聞』第壹號の版式と文字に関する研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	佐藤 優
	副査	九州大学	准教授	伊原 久裕
	副査	九州大学	准教授	池田 美奈子

論文審査の結果の要旨

本研究は、1877年に発行された『筑紫新聞』第壹號を分析し、輪郭線照合によって、鑄造活字版で印刷され、その中でもそれまでの5年間に供給された活字全体の76.6%を占めていた本木昌造系の活字が使用されていたことを明らかにした。昔の印刷物が木造活字か鑄造活字かの判定は、今日まで経験的な鑑識眼に頼っており、既存研究も十分に踏み込んでいない。本研究では、膨大な資料をカメラで撮って1文字1文字の輪郭線を照合するという丹念な作業を行い、合理的に版式を特定した。

第1章では、本研究の背景、目的、対象、方法、構成を述べ、版式の解明と文字の出自の解明を目的として、先行研究と本研究の意義を明らかにしている。

第2章では、明治初期の和装新聞の概要を把握し、文字と明治初期の印刷技術を示し、版式判定に関する文献調査を行い、木版と鑄造活字版の判定方法について考察した。

第3章では、明治初期の和装新聞の資料から採取した3種類のサンプルに対して版式判定法を適用し、その有効性を検証した。サンプル文字は122個（製版文字27個、木活字版文字50個、鑄造活字版文字45個）について検証し、製版の27個はすべて木版であり、木活字版は47個が木版であることを確認し、鑄造活字版はすべて鑄造活字であることを判定した。すなわち、この版式判定が先行研究と一致する結果を導き出した。

第4章では、『筑紫新聞』第壹號の全文字3009個のうち本文文字2825個（漢字1874個、平仮名・変体仮名843個、片仮名70個、記号38個）のうち、同一字種の異体字（漢字684個、平仮名・変体仮名66個、片仮名22個、記号5個）から平仮名・変体仮名は同じ字形の出現が多いため、分析対象として平仮名・変体仮名を用いることとし、「能（の）」20個をサンプルとして輪郭線照合し、鑄造活字であることを結論づけた。

第5章では、平仮名・変体仮名「能（の）」を除く65字形の平仮名・変体仮名について版式判定を行い、照合できないものを除く66字形358個1362組で字形の一致を確認した。繰り返し出現する頻度が低い漢字については、199字形357個中使用できる32字形136個のうち124個が鑄造活字であることを特定し、以上から『筑紫新聞』第壹號が鑄造活字版であることが確実であるとした。

第6章では、本木昌造系の種字とされる諏訪神社木彫文字を撮影、鏡像反転して照合し、さらに本木昌造が自家製の鑄造活字を用いていることが確実な「新塾餘談」の印刷文字との照合を行った。その結果、『筑紫新聞』と「諏訪神社木彫文字」との間で字形が一致するものは20字形、『筑紫新聞』と「新塾餘談」で一致するものは21字形確認した。

第7章では、一連の調査、比較検討、検証をとおして、『筑紫新聞』が鑄造活字版で本木昌造系の活字を使用したものであることを証明した。また、直線的な漢字と曲線的な平仮名・変体仮名の混合する造形にも言及し、今後の課題を示唆している。

以上のとおり本研究は、文献資料においてスキャナを用いることができない実情の中で、撮影、画像処理、輪郭照合という比較方法を用いることによって、膨大な資料を個別に比較し、版式を特定することに成功した。すぐれた成果を認めることができ、この方法を応用することによってさらに他の資料にも対応できる知見が得られた。これまでの鑑識眼に頼っていた手法に対して、基礎的な研究を積み重ねて、合理的な判別を可能にしたことは、緻密な作業の積み重ねと論理的な探求が必要な課題であり、芸術工学らしい独創的な研究である。

従来からの課題を総括して、独創的かつ歴史的にも意義のある版式の解明を行った研究であり、芸術工学にふさわしい総合的な知見を結実させた成果を高く評価した。

よって、本論文が博士（芸術工学）の学位に値するものであることを、本調査委員会は認めた。